

大和川・今池遺跡

発掘資料 その 2

第 3 地区及び試掘地点

1979.3

大和川・今池遺跡調査会

はじめに

大阪府堺市常盤町と松原市天美西町にまたがる大和川・南側沿いの水田地帯である。

第3地区は、松原市天美西町に所在し、古代に大和、河内、和泉を東西にむすんだ大津道を基準とした条里制遺構も整然と現存している。

この3地区は、昭和54年12月1日より昭和55年3月中頃にかけて発掘調査を実施しました。

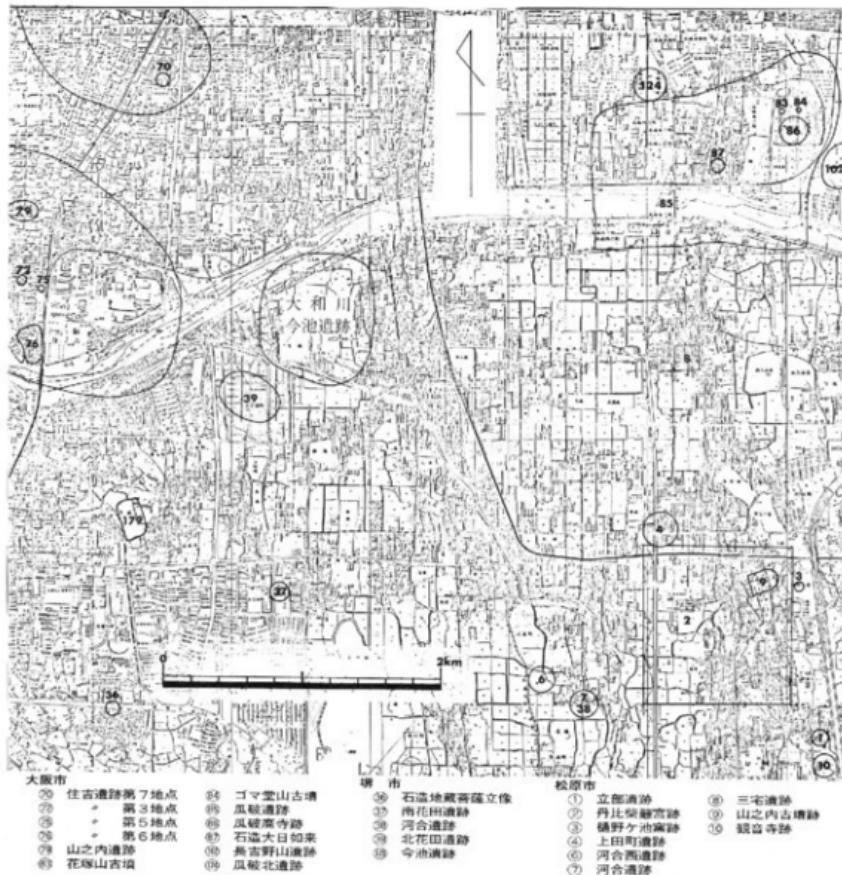
本遺跡は、大阪府の今池処理場計画のあがった昭和52年に埋蔵文化財について試掘調査と第1・2地区の発掘調査を経て判明した古墳時代を中心とした大遺跡である。特に、3地区は古墳時代の掘立柱建物、溝、近世に営まれた多数の井戸が目立つ。本調査において最大の成果は、西南隅に検出された掘立柱建物を保存したことであろう。

尚、発掘調査にあたっては、大阪府教育委員会・石神 怡、堺市教育委員会・奥田 豊氏の指導の下に、堺市教育委員会・森村健一が担当し、佛教大学、関西大学、大阪市立大学、愛泉短期大学の学生諸君の御協力を得た。

本書の作製には、古園哲朗、十河稔郁、川口宏海、森村があたった。



発掘調査風景

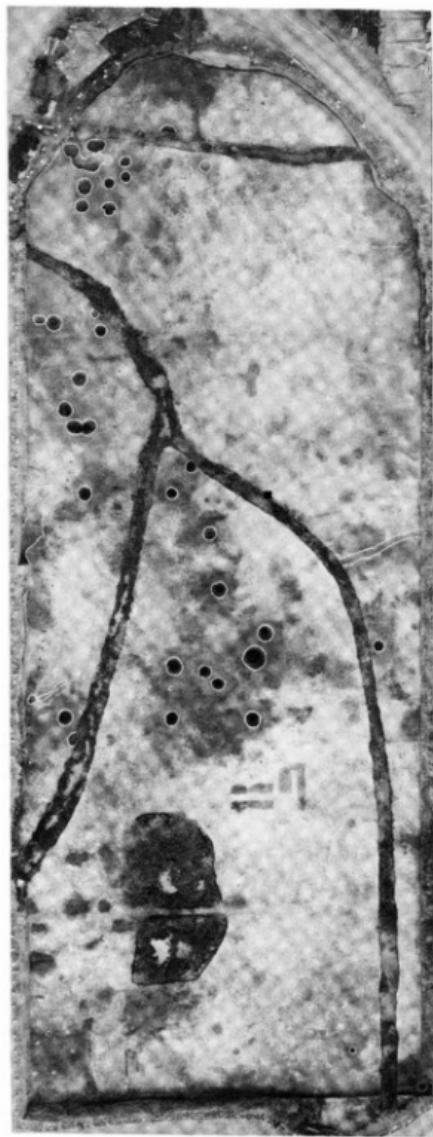


大和川・今池遺跡及び周辺遺跡

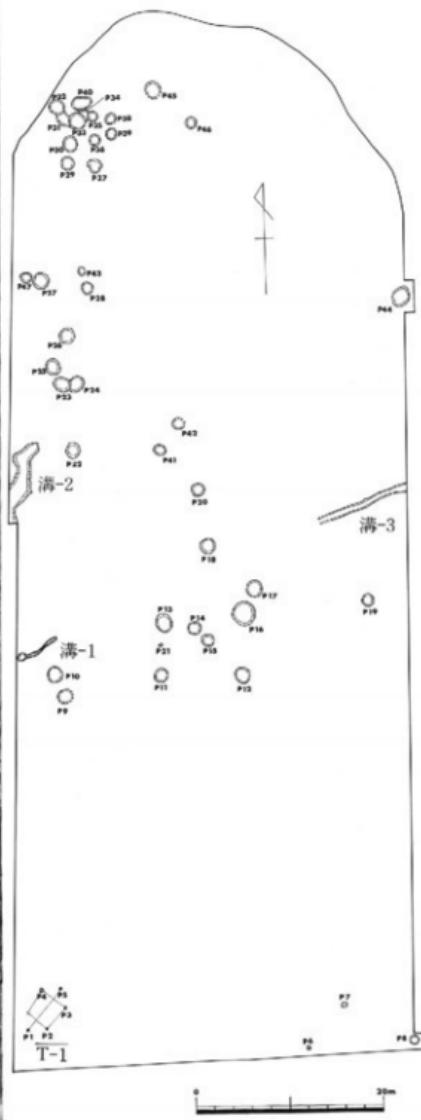
位置と環境

この遺跡は、大阪府堺市北東部から松原市北西部にかけての広範囲にわたる遺跡であり、今回発掘された3地区はこのうち松原市天美西町に所在する部分である。この地域は、上町台地に続く中位洪積台地の東端に位置し、これより東は西除川旧河道の氾濫平野が北方に向って広がっている。

周辺遺跡としては、南に弥生時代の北花田遺跡（中期）・南花田遺跡（中期）があり、古墳時代では、上田町遺跡（前期）・今池遺跡（中期）がある。北では弥生時代の住吉第6号地点遺跡（中期）、東では弥生時代の瓜破遺跡（前期～後期）がある。これらの遺跡はすべて上記の中位洪積台地に位置する。また附近一帯は条里制遺構がよく残り、地図上



3 地区航空写真



3 地区遺構全体図

でみると整然とした地割が復元できる。この条里の起点となっているのが、南方を東西一直線に走る古道の長尾街道である。このほか、本遺跡のすぐ西側には古代の人工池であると思われる依羅池がある。

よみ

第3地区概要

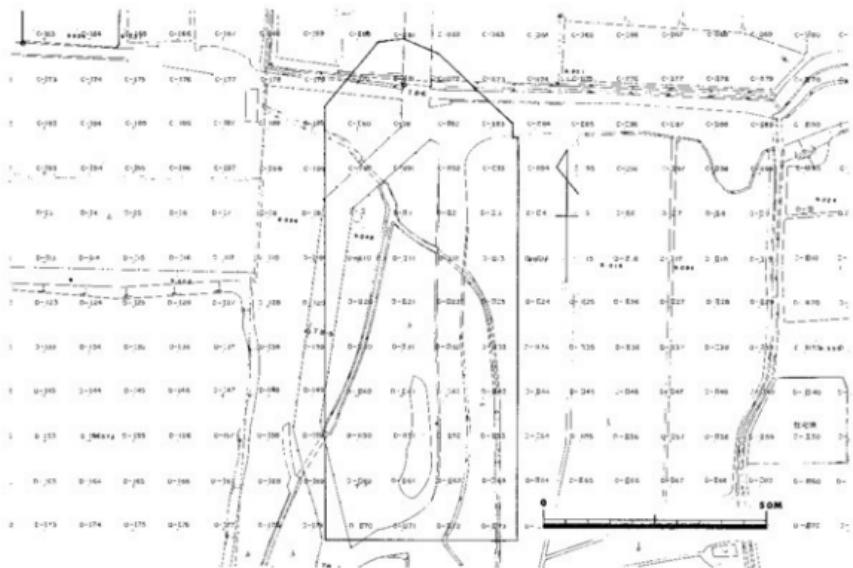
面積4500m²のこの地区から最も多く検出された遺構としては、33基を数える井戸(近世)がある。木桶を重ねて埋め込んだ施設をもつ桶側井戸を1基確認した以外は、全て素掘りの簡単な構造の井戸である。

他に棟持柱を設した掘立柱建物ー1棟、溝状遺構ー3本、土師器、鉄滓などを供なうものを含めた不明の落ち込みー6ヶ所を検出しており、古墳時代に属する遺構である。尚、溝ー1、2は本来1本につながり、溝ー3は第1地区的溝ー1と直交する可能性がある。

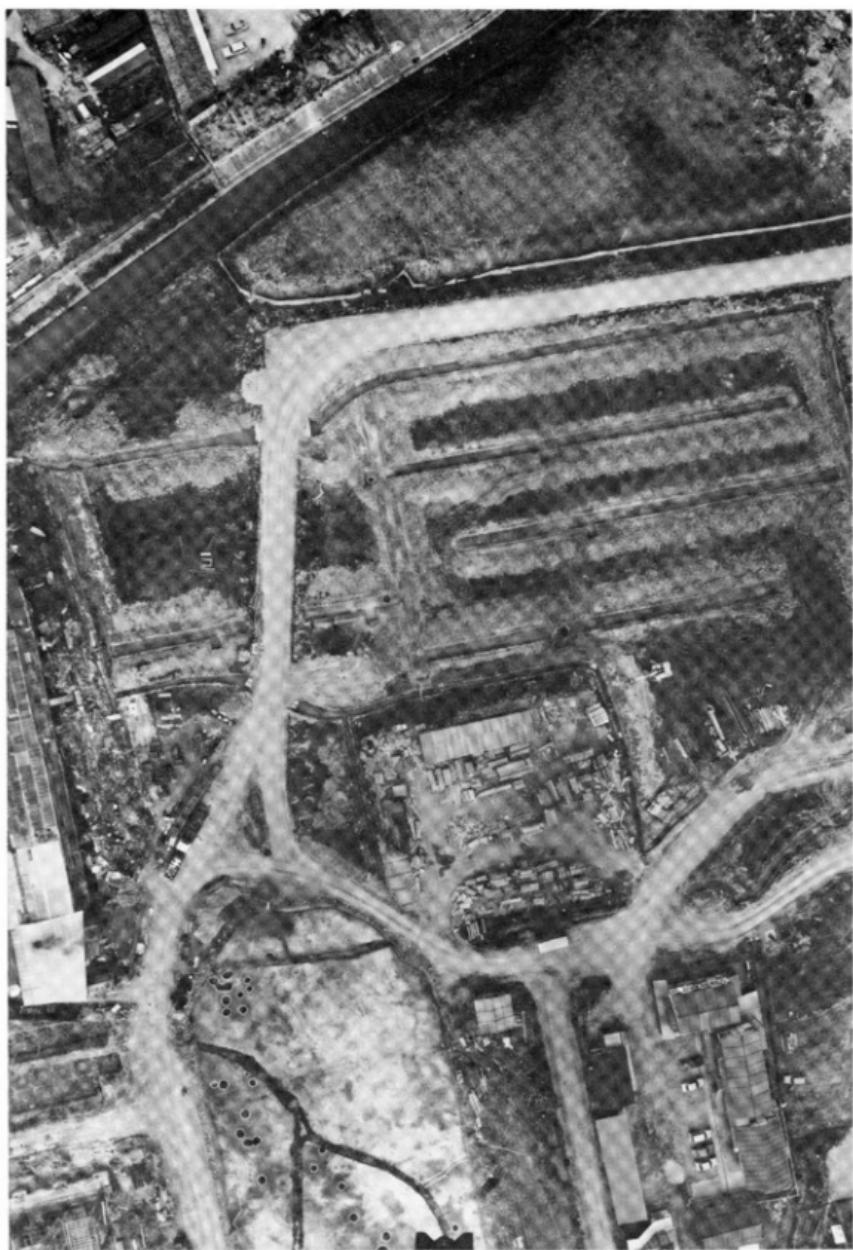
試掘地点

3地区の北東部に隣接した8400m²の区域で7ヶ所の試掘調査を行なった。その結果素掘りの井戸2基(近世、古墳時代)、溝状遺構ー2本、落ち込み数ヶ所を検出した他、土器片も採集できた。

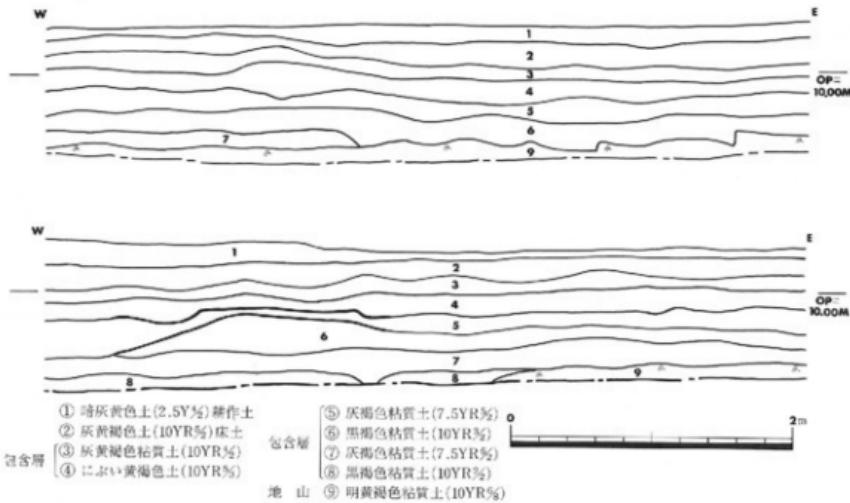
また試掘溝の上層断面においては、南北にはしる条里制遺構(畦断面)を現存する畦畔の直下で確認している。



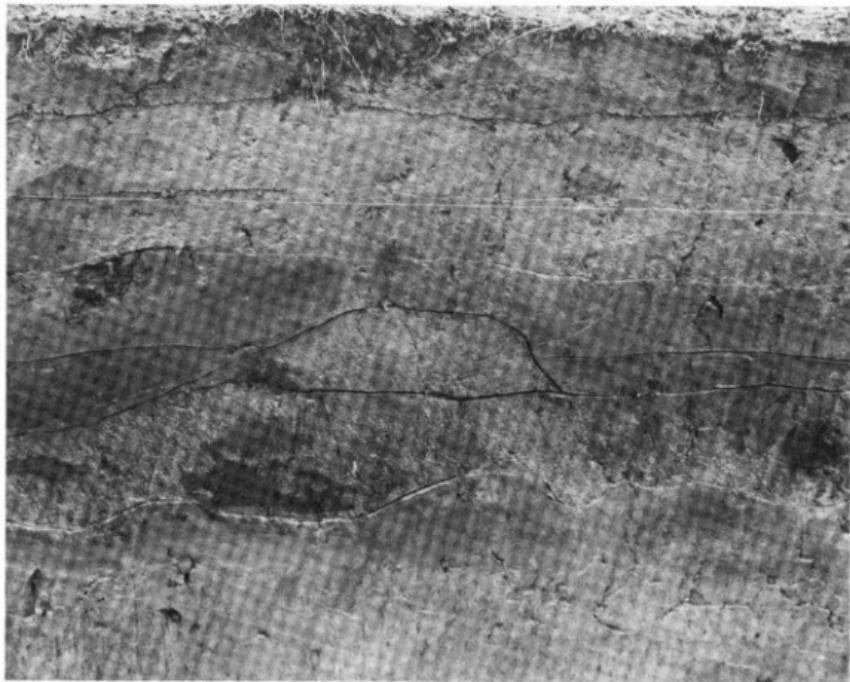
3地区地点図



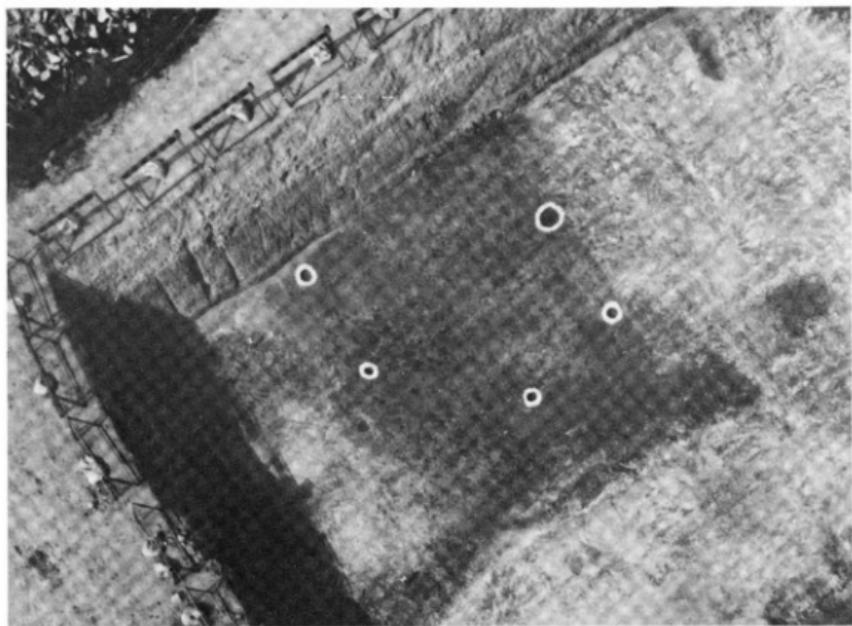
試掘地点及び3地区航空写真



第5 試掘地点土層断面図



第6 試掘地点土層断面 (条里制遺構)



建物（T-1）全景写真

建物（T-1）

3地区の南西隅より掘立柱建物の柱穴を5ヶ所検出した。1ヶ所の柱穴は深さが極めて浅く穴として明確に検出できなかったが、本来は6ヶ所の柱穴をもって1軒の建物がたっていたものである。平面規模は1間×1間（約3m×3m）のほぼ正方形で、北東～南西に軸を有している。さらに主軸に沿って建物から約1.4m離れた両側に各々突き出した1つの柱穴があり、この建物が4本の柱のみで支えられてきたのではなく、棟持柱を特設した切妻造の建築様式であることが解る。

柱穴はいずれも円形で、規模は径15～20cm、深さ10cm程度を計るのが5ヶ所ある。P-4は大型で径約30cmほどで、8cm程垂直に掘り込んだ後さらに仰形状に径10cm、深さ10cmの掘り方をしており、柱根の痕跡を明確に残している。

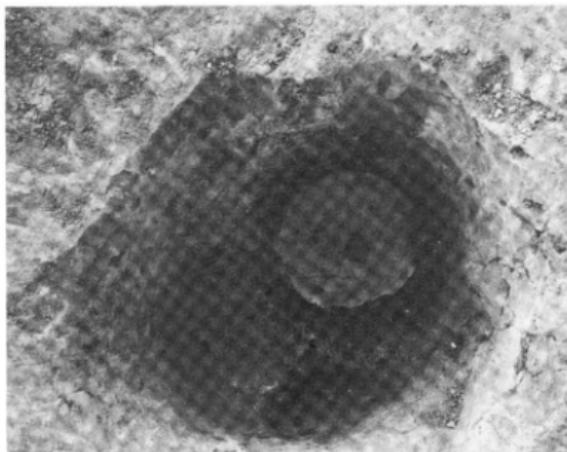
柱穴内に遺物は全く認められないが、建物の上面や周辺からは須恵器片が検出されている。この3地区の建物は隣接する第1地区で検出された掘立柱建物群と密接な関連をもった、6世紀中頃の時期に属する住居址と考えられる。

P-7

南東隅で検出したもので、底より土師器（高杯）が出土した。径60cm程の円形状の平面形を呈し、急傾斜して約30cm掘り込み、幅40cm程の不定形な底部には3ヶ所の凹みがある。

高杯は脚部を欠いた杯部を上にして、西側よりの凹みに安置した状態で検出した。亀裂を生じているものの完形を保っており、出土状態からみても投棄された

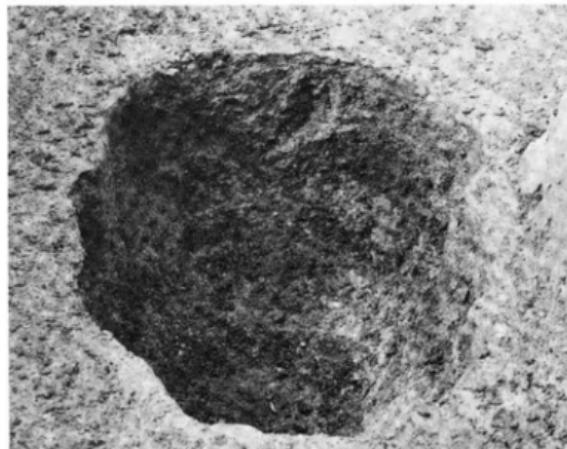
ものではなく明らかに意図的に置かれたと考えられる。ピット内の埋土は単一ではなく基本的に3層（いずれも粘質土）あり、高杯をすぐ埋め戻した形跡はない。



P-7 及び遺物出土状況

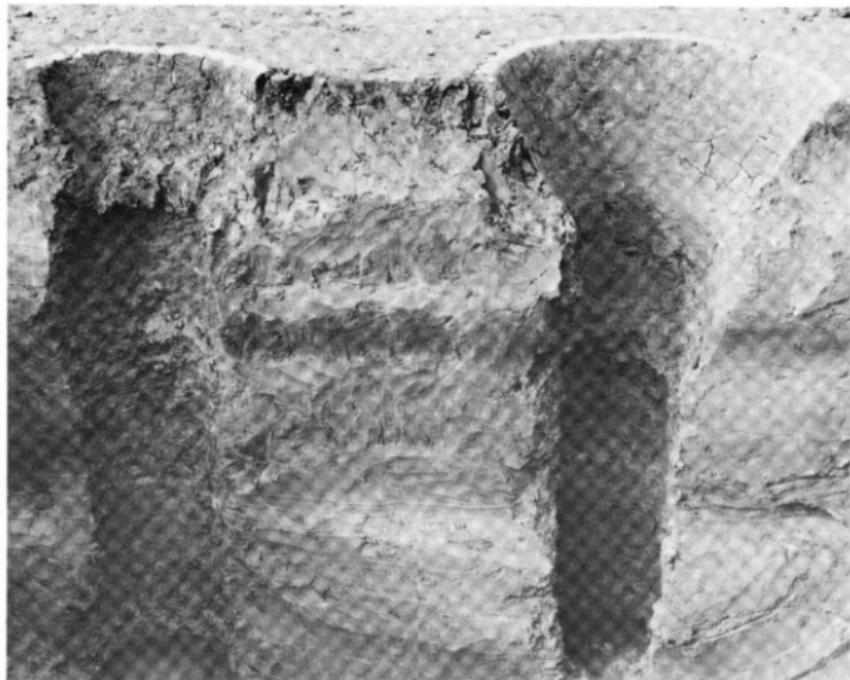
P-8

3地区の南西隅を一部拡張して検出した。70×90cmの隅丸方形をしておりやや平らな丸底へ約55cm掘り込んでいる。ピット内の中層（-15cm）以下には大量の黒色土が埋まっており、この中からは土師器片と鉄滓が出土した。倉庫などの大きな掘立柱建物の柱穴の可能性があるが、対応する柱穴は地区外と思われ確認されていない。



P-8 及び遺物出土状況

P-7、8は共に5世紀前半頃の遺構と思われ、T-1とは異なり3地区西南に隣接する2地区の遺跡とより密接な関係が考えられる。



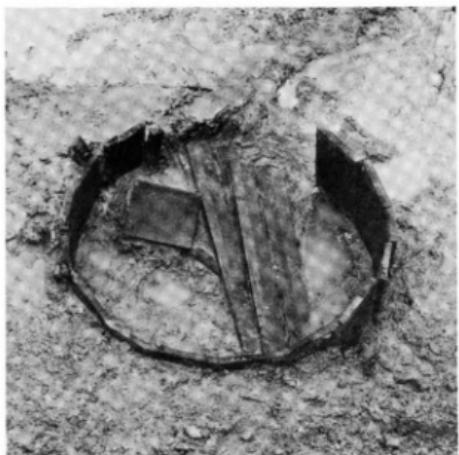
P-9、10 (井戸) 断面

井戸（素掘り）

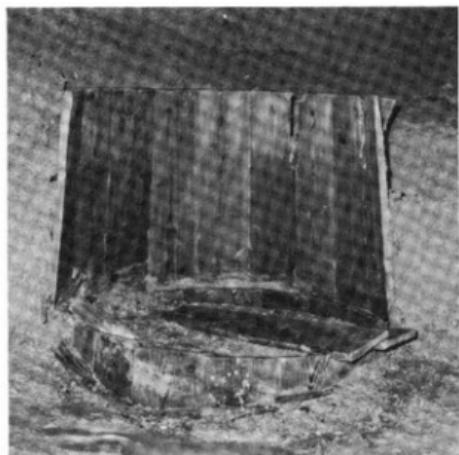
地面を湧水が得られるまで掘り下げただけの特別な施設をもたない井戸で、近世に耕作用として利用されたものである。3地区の中央から北西側にかけて集中して32基検出したが、多くはかなり近接しており中には上面で重なり切り合っている例も確認され、これらの井戸が全て同時期に造られたのではなくある程度の時期差があることが解る。

いずれも円形ないし楕円形をした径1.3m～1.5mを測る平面規模の井戸が最も多い。掘り方は上面より0.5～0.8mほど内側へ斜め（逆八の字形）に掘り込み、その後ほぼ垂直に掘り下げているが、中央部、底付近で外側へえぐれてふくらんでいるのもあった。砂土層に達する底までの深さは必ずしも一定ではなく、本来の地表面から浅いもので3.5m、深いもので5m程を計測した。尚、調査中ほとんどの井戸から現在でも井戸として利用可能なほどの大量な湧水をみた。

井戸内より出土する遺物は極めて少なかったが、P-27の深さ1.7mの所から木桶（径20cm、高さ16cm）が出土した。



桶側井戸 1段目平面



桶側井戸 1段目断面

下段の桶は上段とほぼ変わらない構造であるが、17枚の板を使い下方への広がりが小さいのが異なる。

桶は底部2段しか検出されなかったが、埋土から数枚の瓦が出土しており、本来は後2～3段ほど桶が組まれ最上端には瓦を積んだ構造であったらしい。おそらく何らかの目的で上段部の桶が撤去され、今回の調査で検出した2段の桶組は底部の残存部分であると考えられる。

桶側井戸 (P-16)

3地区のほぼ中央に位置する井戸の上面より約2m掘り下げた砂土層で、板を寄せ合わせた桶が2段重ねた状態で検出され、この井戸が桶側井戸の構造をもつたものであることが確認された。

井戸の上面は径約2.4mの円形で大きいが、他の素掘りの井戸と同様に内側へ斜めに掘り下げられている。

2段の桶は15cmほど重ね合わせられ、上・下段の接合部には外側から10数本のつるが巻かれてあった。両段とも2～3枚の板が倒崩している程度のほぼ完全な形で残っていた。上段の桶は、長さ95cm、上端幅20cm前後で下端幅がやや広く、厚3cm程の板18枚を円形に寄せ合わせ、外側に2～3cm幅の竹を4本寄り合わせたたがを4段しめ回して造られており、上端径115cm、下端で130cmを計り下方へ八の字形に広がった形をしている。板の中には下端幅の方が狭いものが数枚あり、桶の形を調整するための工夫がみられる。また各板の上・下端部の内面は1cm幅ぐらいで斜めにカットされ、側辺に湧水を吸収するための切り込みが2～4ヶ所施されている板もかなり組まれていた。



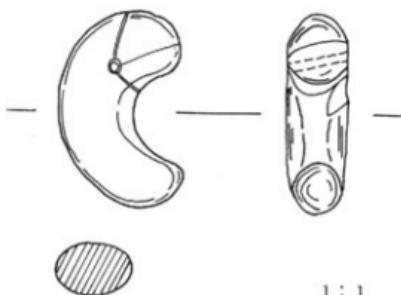
高杯 P 7 から出土したこの土師器の高杯は杯部のみであった。その上方へ向ってゆるやかに拡がり上端に至って大きく外反する口縁部の特徴から、5世紀前半（古墳時代中期）のものであろうと思われる。胎土は淡い黄橙色を呈し、かなり荒い砂粒を含んでいる。



鉄滓 P 8 から検出された鉄滓（スラッグ）は、鉄を鍛冶する際にしばり出された鉱石中の不純物であり、写真（上）のものは最大径約 3 cm、長さ約 9 cm である。



勾玉 D II 60 地点の包含層より出土。滑石製で頭端に 3 本の線を刻んだ、いわゆる丁字頭勾玉であった。



1 : 1

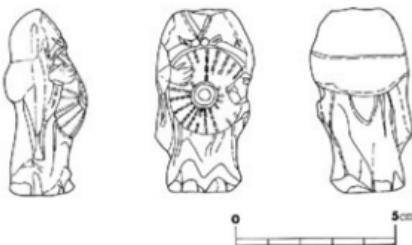


1 : 1

銅錢 D II 62地点より出土
した銅錢は一部欠損していたが、「元豊通宝」と判読できた。この銅錢は中国北宋期の1078年に鑄造され、のちに日本へつたえられた渡米

錢である。

土製人形 D II 62地点床土層より僧侶（西行法師）を模したと思われる土人形が検出された。人形は頭部と左手部分が欠落していたが、頭部については故意に割りとったものではないかと考えられる。この種の人形は、型に粘土質をつめ込み前後を貼り合せたあとはみ出した部分を削り焼き上げたものである。



まとめ

この地区からは、6世紀中頃に建てられた棟持柱を有する掘立柱建物と、北東に向けてはしる2本の排水溝がみつかった。西側（第1地区）で検出された遺構とも考え合せて、これらの建物、排水溝は企画性にもとづいて設定されているようである。

2ヶ所の不明ピットからは土師器片、高杯、鉄滓が出土しており、時期には5世紀前半期があてられる。近世の素掘り井戸、桶側井戸も33基確認された。

試掘地点には、3地区から北にのびる洪積台地上に多くの遺構が存在し、東側は一段下がった水田跡と思われる。また現存する畦畔の直下に条里制施行時の畦が所在し、一町巾が108mであることが復元出来た。



今池遺跡 N-3 地区 落ち込み（東→西）

周辺遺跡紹介その①～堺市今池遺跡

広く百舌鳥古墳群と一体として考える必要のある今池遺跡は、学校建設によってこの世にあらわれた広大な遺跡である。

緊急調査ではあったが、溝6本・落ち込み1ヶ所を検出した。中でも溝一4は、最下層に弥生第V様式を含有するが、5世紀後半に入ってから大掘削工事が行なわれたと考えられ、生活に密着し約100年近くその機能を果していたようである。このことは、5世紀代の大土木工事を物語り、集落の大きさとその重要性を私達に考えさせるのである。またただ1ヶ所の落ち込みの須恵器群は出土状態、土留め、他の地区とは比較にならない程の完形品土器の量と、溝一4の土器量が大量であったことから総合して、祭りに関係のある遺構と考えられる。さらに、古代の生活の道であった長尾街道の存在をみると、海百舌鳥古墳群、そして古市古墳群とを結ぶ古代主要ルートに接した生活と祭りのための遺跡としての重要さが加えられるのである。

今池遺跡の立地は、百舌鳥古墳群という大古墳群が三国ヶ丘台地上を占用した結果、その丘陵上での営みを捨てざるを得なかった人々の存在という興味ある事実を明らかにしている。その意味でこの地は、海にそそぎ込む小川沿いで、又、一年中西風の吹く海岸沿いの丘陵上をさけた後退した地形という、集落を形成する上で自然条件が十分考慮された適地といえるであろう。



勾 玉

